

# 県立広島大学のドイツ短期海外研修教育効果の検証

— 研修参加者への質問紙調査を通して —

Empirical Study of Educational Implication of

Short-term Training Programs in Germany

by the Prefectural University of Hiroshima:

Utilizing Questionnaire Survey Methodology

県立広島大学保健福祉学部教授 三原 博光

MIHARA Hiromitsu

(Professor, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima)

キーワード：短期海外研修、ドイツ、質問紙調査、海外留学

## 1. はじめに

県立広島大学では、2008年以降、毎年、学生や広島県内外の医療福祉関係者が、主にドイツの社会福祉系の大学・医療福祉施設を訪問し、現地の関係者との国際交流を続けてきている。ドイツ短期海外研修プログラムでは、研修参加者はドイツの社会福祉系大学、特別養護老人ホーム、障害者施設、精神病院などを訪問し、現地関係者と英語・ドイツ語を通して国際交流を行い、研修参加者にとって貴重な経験になっていると考えられる。そこで、ドイツ短期海外研修に参加した学生や医療福祉施設関係者が医療福祉施設機関で働くなかで、ドイツ短期海外研修をどのように評価しているのか、すなわち、ドイツ短期海外研修の教育効果を調べるのが重要であると考えた。ドイツ短期海外研修に対しては、大学が学生に渡航費の一部助成金を支給し、2015年のドイツ短期海外研修では、JASSO（日本学生支援機構）から奨学金を頂いた。学生が大学や外部団体から海外渡航費に関する助成金や奨学金を得ている状況で、学生のドイツ短期海外研修の教育効果を確かめることも教員の責務であると思われる。

以上の経緯から、今回、ドイツ短期海外研修参加者に質問紙調査を実施し、調査結果を得たので報

告をする。なお、県立広島大学は、2011年9月にドイツ・ノルトライン・ヴェストファーレン州にある社会福祉系の大学、NRW カトリック大学 (Katholische Hochschule Nordrhein-Westfalen) と国際学術交流協定を結んでいる。

過去、海外への留学や短期研修は、多くの場合、語学や異文化体験の海外研修が中心であり (木村 2011; 和栗 2012; 黒崎 2013; 山内 2015)、保健福祉などの研修を目的とした研修報告は、有田ら (2015) の日米の看護学生の交流、中川ら (2015) の日独の理学療法の学生の交流報告のみが報告されており、社会福祉領域に関する交流報告がほとんど行われていないのが実情である。しかしながら、わが国は、ドイツのハンブルグ市の貧困者を支援したエルバーフェルト制度から民生委員制度を作り上げ、そして更にドイツの介護保険制度や老人介護士をモデルに、1987年に介護福祉士国家資格制度、2000年に公的介護保険制度を作り上げた。これらの意味で、日本とドイツの社会福祉の結びつきは強く、ドイツとの国際交流は意義深いと言える。

## 2. ドイツ短期海外研修プログラム

ドイツ短期海外研修プログラムは、主にアーヘン (Aachen) 市内の以下の機関の訪問を中心に実施されている。研修は、主に4年生を対象に、卒業をする前の2月に実施されている。

### (1) ローテ・エアデ特別養護老人ホーム (Rothe Erde Altenpflegeheim)

54名の高齢の利用者が生活をする比較的小規模な施設である。研修参加者は、まず、施設長からドイツ全体の高齢者福祉の実情と特別養護老人ホームの概要の説明を受ける。その後、研修参加者は、英語、あるいはドイツ語で自己紹介を行い、職員、利用者と簡単なボール遊びをする。そして、施設内を見学し、利用者と簡単な会話をし、一緒に食事をして、記念写真を撮る。記念写真は、帰国後、学生が英語のお礼状と一緒に施設長、利用者へ送り、非常に感謝されている。

### (2) アレキシアーナ精神病院 (Alexianer Krankenhaus)

この精神病院は13世紀、アレキシアーナ兄弟会により教会として設立され、古くから病人や貧困者支援で680年の歴史を持つ。病床数は180床で病院敷地内には教会が併設され、患者や地域住民に開放されている。研修参加者は、訪問時、まず病院の医療ソーシャルワーカーから病院の歴史、実情、治療方針などの説明を受ける。研修参加者は病院内の作業、リハビリテーションの場面を見学し、患者や職員と一緒に音楽療法に参加し、ドラム、タンバリン、ギターなどを楽しく演奏をする。研修参加者にとって、ドイツの精神病院で患者・職員と一緒に楽しく音楽療法に参加することが貴重な体験となっている。また、この病院で、2014年、県立広島大学院生がドイツ語・英語を通して3週間の実習を行い、ドイツの精神障害者に対する医療ソーシャルワークについて学ぶことができた。

### (3) 障害者総合施設アーヘン (Lebenshilfe Aachen)

1962年、ドイツの障害者の親の会により設立。活動内容は障害児の早期治療・訓練、幼稚園、通所

サービス、授産事業である。授産事業では、障害者が一般事業所から依頼された金属・木材・包装作業、事務作業、喫茶店業務などを行っている。授産部門では、800名の障害者、250名の職員が従事している。研修参加者は、施設長からドイツの過去の障害者福祉事情(ヒトラー時代の障害者虐殺など)、施設の概要、障害者の就労状況についての講義を受ける。講義後、施設内の見学を行い、施設職員と日独の障害者福祉についての意見の交換を行う。将来、この施設の関係者が日本の障害者施設での研修を希望しており、県立広島大学関係者が、この希望の実現に向けて調整を行っている。

#### (4) カイザースベルト学園・博物館 (Die Kaiserswerther Schwesternschaft Müseum)

ドイツの看護の歴史が紹介された博物館である。ナイチンゲールがこの学園を訪れ、教育を受けたことが、博物館の資料で紹介されている。博物館にナイチンゲール記念病院、保健医療福祉系の専門大学が隣接している。研修参加者は、博物館・病院を見学し、専門大学の教職員・学生と日独保健医療福祉についての意見交換を行う。2015年の学生との意見交換には、ドイツの学生10名が参加し、日独の看護教育、社会福祉教育、医療・介護保険の問題について議論を行った。

#### (5) NRW カトリック大学 (Katholische Hochschule Nordrhein-Westfalen)

研修参加者は、大学で日本の医療福祉の実情をスライドで報告し、日独の学生が英語・ドイツ語を通して意見の交換を行っている。2013年、日本の社会福祉教育、社会福祉施設、介護保険について、教員・学生が、英語・ドイツ語で資料を作成し、意見交換を行った。そして更に、県立広島大学とNRWカトリック大学の関係者が、共同で日独学生の社会福祉に関する専門的関心・動機づけなどの国際比較調査を行い、調査結果を社会福祉の専門雑誌に紹介した。

#### (6) ドイツで老後を考える日本人高齢者自助団体との交流

ドイツのミュンヘン、ハイデルベルグ、ハンブルグなどの大都市には、国際結婚や仕事などで長期間ドイツに滞在し、ドイツで老後を考える日本人高齢者の自助団体が存在する。これらの団体の会員は、健康、認知症予防、日本語や日本食による介護の研究を行ない、日本の文化(日本語、日本食など)を尊重した介護をドイツで希望している。研修参加者は、これらの団体を訪問し、ドイツでの日本人の老後生活を学び、同時にこの団体の会員と一緒にドイツ歴史文化遺跡を訪問、説明を受け、ドイツ文化を学ぶ。一方、団体の会員は、研修参加者からの日本の医療福祉情報の提供や交流に喜びを感じている。

上記の施設以外に、研修参加者は、アーヘン大学医学部付属病院、リハビリテーションセンターを訪問し、医師、看護師、理学療法士、医療ソーシャルワーカーなどからドイツの医療福祉の情報を得る。なお、研修参加者のドイツの医療福祉施設訪問の調整は、NRWカトリック大学が行っている。

### 3. 調査方法

#### (1) 調査対象者

2008年から2016年までのドイツ短期海外研修に参加した県立広島大学の現役生、卒業生、教職員、県立広島大学院生、広島県内外の医療福祉施設職員を対象とした。研修参加者の専門領域は社会福祉、理学療法、栄養学、看護学であった。医療福祉施設職員は、知的障害者施設や病院で社会福祉士、看護師、理学療法士として勤務していた。

#### (2) 調査方法

ドイツ短期海外研修の評価を調べるために質問紙調査を実施した。研修参加者に調査用紙を郵送で配布し、回収した。現役学生には、直接、調査用紙を配布し、後に回収した。なお、質問紙は無記名であること、統計的処置を施し個人が特定されないこと、研究以外の目的に使用されないこと等の記述により、倫理的配慮をした。調査期間は2015年7月から2016年4月までであった。

#### (3) 調査内容

質問紙における調査項目は、(1) ドイツ訪問の思い出、(2) 研修の意義、(3) 再度のドイツ研修参加希望、(4) 属性(性別、卒業年度、所属学科、勤務内容、海外旅行経験の有無など)、(5) 自由記述、であった。主な質問項目数は自由記述を含め、11項目であった。調査項目の作成は、過去の海外留学や国際交流の調査報告等(川内2006; 中川ら2013; 山内ら2013; 有田ら2015)を参考にし、独自に作成した。

#### (4) 分析方法

質問紙により回収したデータは、単純集計で全体の状況を把握した。本研究では、統計ソフトSPSS Ver. 14.0を用いて、集計した。それぞれの項目には、回答拒否・欠損も含まれるため最終分析対象者は項目によって異なる。なお、質問紙は63部配布し、59回答があり、回収率は93.6%、有効回答数は59であった。

### 4. 調査結果

#### (1) 基本的属性(表1参照)

59名の回答者の7割は女性であり、年代は20歳代が6割近くであった。5割は県立広島大学の卒業生であった<sup>注1)</sup>。現在の職種は、施設職員、公務員(社会福祉関係)、医療ソーシャルワーカーなどの社会福祉関係であった。過去、ドイツ短期海外研修以外の海外訪問の体験は「あり」43名(72.9%)、「ない」16名(27.1%)であり、その海外訪問の目的は旅行25名(42.4%)が最も多かった。

#### (2) ドイツ訪問の思い出

##### ① 現在、ドイツ訪問経験を思い出すことがあるか。

「よくある」17名(28.8%)、「時々ある」38名(64.4%)、「あまりない」2名(3.4%)、

「全くない」1名（1.7%）と回答し、9割以上が思い出すと回答していた。

②どのような時にドイツ訪問の経験を思い出すか。（表2参照）

5割が「ドイツに関する新聞記事・テレビ番組などをみたとき」と回答していた。

表1 調査対象者の基本属性

項目		人数	%
人数		59	100.0
性別	男性	15	25.4
	女性	43	72.9
年齢	20代	35	59.4
	30代	4	6.8
	40代	2	3.4
	50代	5	8.5
	60代	7	11.9
所属	現役生	4	7.4
	卒業生	30	55.6
	大学院修了者	8	14.8
	社会人	6	11.1
	県立広島大学教員	4	7.4
	県立広島大学院生	2	3.7
現在の勤務内容	公務員	6	10.2
	大学教員	6	10.2
	施設職員	13	22.0
	施設長	2	3.4
	社会福祉士	2	3.4
	医療ソーシャル ワーカー	6	10.2
	精神保健福祉士	2	3.4
	理学療法士	6	10.2
	看護師	2	3.4

表2 どのような時にドイツ訪問の経験を思い出すか。

項目	人数	%
ドイツ人やドイツに住む日本人とメールのやり取りをするとき	4	6.8
ドイツに関する新聞記事・テレビ番組などをみたとき	34	57.6
海外（ドイツ以外）の新聞記事・テレビ番組をみたとき	3	5.1
街などで外国人をみたとき	2	3.4
その他	8	13.6



その他	仕事で悩んだとき
	何気ない時
	講義で紹介する時
	一緒に旅行した人と話すとき
	仕事で折に触れたとき
	写真を見返すとき

(3) ドイツ研修の意義

①ドイツ訪問はどうであったか。

「非常に良かった」51名(86.4%)、「まあまあ良かった」8名(13.6%)と回答し、全員が良かったと回答していた。

②ドイツで特に何が良かったか(表3参照)。

「ドイツ人との交流」と「ドイツの医療福祉施設訪問」の回答がそれぞれ3割と多かった。

表3 ドイツで特に何が良かったか。

項目	人数	%
ドイツ歴史文化遺跡見学	6	10.2
ドイツの医療福祉施設訪問	20	33.9
ドイツ人との交流	21	35.6
ドイツの食文化体験	1	1.7
その他	4	6.8



③ドイツ研修が生活・仕事に役立っているか。

「非常に役立っている」20名(33.9%)、「まあまあ役立っている」27名(45.8%)、「あまり役立っていない」6名(10.2%)、「分からない」6名(10.2%)であった。8割近くの回答者が「役立っている」と回答していた。

④「役立っている理由」(自由記述)

- ・世界観、発想が広がった。
- ・人生の中でとても貴重な経験をさせてもらい、心の中にずっと残っている。
- ・日本を客観的に見ようとするようになった。日本を誇りに思うことが多くなり、自分自身にも自信がついた。
- ・障害者に関するドイツの考え方、障害者自身の在り方が、日本の障害者の社会的自立を支援する上で、仕事の考え方の参考になっている。
- ・英語に興味を持ち、英語の勉強を始めた。ドイツと比較することによって、現在の自分の仕事の立ち位置を確認することができた。

⑤ドイツ研修から何を学ぶことができたと思うか(表4参照)。

「日本の実情」、次いで「外国の保健医療福祉制度」の回答が多かった。

表4 ドイツの研修から何を学ぶことができたと思うか。

項目	人数	%
外国の保健医療福祉制度	14	24.6
異文化	13	22.9
国境を越えた人間の繋がり	9	15.9
日本の実情	21	36.6

## (4) 再度のドイツ研修希望

## ①もう1度、ドイツを訪問したいと思うか。

「是非訪問したい」35名(59.3%)、「できれば訪問したい」23名(39.0%)、「分からない」1名(1.7%)であり、ほぼ全員が「訪問したい」と考えていた。

## ②どこを再び訪問したいと思うか(表5参照)。

「ドイツの医療福祉施設」28名(50.9%)が最も多く、次いで「ドイツ歴史文化遺跡」22名(40.0%)が多かった。

表5 どこを再び訪問したいと思うか。

項目	人数	%
ドイツ歴史文化遺跡	22	40.0
ドイツの医療福祉施設	28	50.9
ドイツ人の知人・友人訪問	5	9.1

## ③周囲の人にドイツ訪問を勧めたいと思うか。

「是非勧めたい」45名(76.3%)、「まあまあ勧めたい」14名(23.7%)と回答し、全員が「勧めたい」と回答していた。

## ④「勧めたい理由」(自由記述)

- ・旅行中、全てのことに感動したため。
- ・時に異文化に触れ、又、時に解放され、日本での自らの立ち位置や思考パターンを確認することができ、振り返ることができる。
- ・単なる旅行では得ることのできないドイツの医療福祉の現状を知ることができ、また医療福祉関係者と交流することができる。
- ・メンバーとの交流が良く、研修を楽しく学ぶことができた。

## 5. 考察

調査結果から、研修参加者のほとんどが、ドイツ短期海外研修に満足をし、研修経験を思い出しな

がら、各職場でその経験を生かして働いていると思われる。わが国は島国であり、日本の若者は日常生活のなかで異文化の外国人と触れる時間や機会が少ない。したがって、ドイツの人々と触れあうことは日本の若者にとって新鮮、魅力的であり、かつ異なる世界の価値観を知ることになり、広い視野を持つことになるのであろう。

以下、研修参加者がドイツ海外短期研修に満足した要因について述べる。

まず、一つ目の要因は、本研修が単なる旅行ではなく、研修参加者の専門領域に関わる医療福祉関連施設や大学を訪問し、現地関係者と意見交換や食事会交流を含めた国境を超えた人間的触れ合いの交流を持つことができたことがあげられよう。特別養護老人ホームでは、利用者と楽しく話をし、一緒に記念写真を撮る。精神病院では、音楽療法に参加し、ドイツ人職員や患者と一緒に楽しく楽器の演奏をする。大学では、ドイツの学生・教職員と日独医療福祉についての意見交換を行う。研修参加者は、現地のドイツ人と交流することで日本の良さ・問題点を見つけ、自分自身を振り返る自己発見をしていると考えられる。また、多くの研修参加者は、ドイツ研修を通して、日本の実情を学ぶことができたと回答していた。そして、ドイツ短期海外研修が研修参加者の自己発見になっていることは、ドイツ短期海外研修が「役に立っている」「他者にドイツ訪問を勧める」の質問項目の自由記述のなかでも回答されている。研修参加者は、必ずしも英語・ドイツ語を流暢に話すことができなかつた。しかし、特別養護老人ホーム、障害者施設、病院などの医療福祉機関の利用者との交流は、流暢な会話能力よりも、相手の立場を思いやる優しい笑顔、身振りなどの非言語的コミュニケーションが重要になってくる。その意味で、従来わが国の海外研修の中心である語学研修に加えて、現地の老人ホーム、障害者施設、病院などの医療福祉機関の利用者との交流は、学生に国際交流の更なる興味・関心を持たせる一つの機会になるのではないかと思われる。

次の要因としては、研修参加者の卒業生がドイツ短期海外研修に参加した時の学年が4年生であったこともあげられよう。彼らが既に日本で専門的学習体験や実習体験をしていたことで、日独の医療福祉制度の比較が可能となり、充実したドイツ短期海外研修になったと考えてもよいであろう。ドイツ短期海外研修は、主に卒業を前にした4年生を対象とし、毎年、2月上旬に実施されている。このような時期にドイツ短期海外研修を企画した理由は、参加学生は1~3年生の夏休み・冬休みの間、社会福祉士・理学療法士といった国家資格のための福祉施設・病院実習を行い、4年生の前期・後期は就職活動を行なうため、学生にとって4年生の卒業前の2月が好ましい時期となるのである。大学で留学相談や国際交流などを目指す学生相談のなかで、就職や経済的状況から「4年間で卒業できる留学」を期待していることが指摘されている(池田 2011)。そして更に、2月にドイツ短期海外研修を実施する利点としては、経済的事情もある。2月上旬は、航空運賃、ホテルなども夏シーズンに比較して、格安となり、経済的に苦しい学生も何とか参加が可能な状況である。経済的事情も海外研修への参加に大きな要因とも言われている(小林; 2011, 小島ら 2015)。したがって、海外短期研修の

時期に関しては、ある程度の専門的学習体験を積んだ上級学年（3，4年生）や経済的に安価な旅行シーズンオフを選ぶのが成功の要因になると思われる。

次に、研修参加者がドイツ短期海外研修に満足した要因として、参加したメンバー同士の好ましい交流があったこともあげられよう。ドイツ訪問を他者に勧める理由の自由記述のなかで「メンバーとの交流が良く、研修を楽しく学ぶことができた」ことがあげられていた。研修には、お互いに親しい友人、面識のある教員が参加し、見知らぬ異国の地でお互いをサポートしながら、自由時間などを楽しく、有意義に過ごすことができたと考えられる。したがって、充実した満足した短期海外研修には、参加者同士の好ましい交流ができるような配慮が引率教員には必要とされよう。

研修参加者の卒業生のなかには、職場で主任や主幹クラスに昇進したものも存在する。また、職位が福祉施設長、病院の看護師長にあるものも研修に参加した。ドイツ短期海外研修の国際交流の経験が異文化の多様性を学び、自分の文化に自信を持ち、自尊心を育むことでグローバルな視点を持ったリーダーの養成に貢献しているのではないかと思われる（飯野 2015）。

## 6. 今後のドイツ短期海外研修の展望と課題

2011年、県立広島大学と NRW カトリック大学の国際学術交流協定締結以降、2016年現在、毎年、両大学の学生約10名前後が両国の大学と医療福祉機関を訪問し、国際交流を行っている。両国の学生がそれぞれの国の大学と医療福祉機関を訪れることにより、両国の医療福祉機関の現場の関係者も、日独の医療福祉制度・実情に関心を持つようになった。このような状況のなかで、新しい取り組みとして、県立広島大学と NRW カトリック大学の教育カリキュラムのなかで、日独の医療福祉機関の研修を教育単位として認めることになった。県立広島大学院では、「国際保健福祉学特論」の科目を開講し、海外の保健医療福祉機関でのフィールドワークを単位として認定し、2014年と2015年にドイツ短期海外研修に参加した大学院生は、この科目の単位を取得している。一方、NRW カトリック大学も学生の海外実習の単位として認定している。NRW カトリック大学の学生が、将来、日本の児童養護施設、障害者施設、老人ホームでの実習を希望している。そして、広島県内の社会福祉機関はその受け入れを前向きに検討し、日本語の語学面と衣食住の面を含めた支援の検討を県立広島大学関係者と一緒に協議している。

今後の課題としては、国際交流の場合、中心となる教員がいなくなれば、国際学術交流協定も形骸化することが多いと言われているが（池田 2011）、中心となる教員が定年退職、あるいは転職などによって不在になることを予想した上で、県立広島大学組織全体としての国際交流の取り組みが必要とされよう。

## 注

1) 表1のなかの大学院修了者とは、県立広島大学院修了者及び県立広島大学院外の大学院修了者を意味する。研修参加者には、他大学で学部を卒業し、大学院を県立広島大学院で修了したものも存在する。

## 参考文献

1. 有田久美・大林和子・石橋曜子ほか（2015）「看護学科における国際交流活動の現状と課題—第2報 米国ウオッシュバン大学看護学部との国際交流」『福岡大医紀』42（1），189—196.
2. 飯野正子（2015）「国際交流の目指すもの—日本の若者は内向きか？」『カリタス女子短期大学紀要』49，31—5.
3. 池田庸子（2011）「海外留学の意義とメリットを考える—海外留学によって何が得られるか」『留学交流』4. 2011.  
入手先<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/yokoikedada.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/yokoikedada.pdf)>（2016. 11. 7）
4. 木村啓子（2011）「短期海外研修プログラムの効果と役割」『留学交流』9.  
入手先<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/keikokimura.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/keikokimura.pdf)>（2016. 11. 7）
5. 川内規会（2006）「大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究」『青森保健大雑誌』7，（1）37—44.
6. 黒崎 真由美（2013）「海外留学の意義と効果—短期海外研修&三か月留学」『留学交流』29.  
入手先<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/201308kurosakimayumi.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/201308kurosakimayumi.pdf)>（2016. 11. 7）
7. 小島奈々恵・内野悌司・磯部典子ほか（2015）「日本人大学生の国際交流に関する意識調査—「内向き志向」と国際交流意思の関係」『総合健康科学：広島大学保健管理センター研究論文集』31，35—42.
8. 小林明（2011）「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『留学交流』2.  
入手先<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/akirakobayashi.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/akirakobayashi.pdf)>（2016. 11. 7）
9. 中川昌和・角野善司・Tarnほか（2015）「ドイツ・フレゼニウス大学と本学との国際交流に対する学生の印象の比較調査」『高崎健康福祉大学紀要』14，23—9.

10. 山内ひさこ・山田健太郎・三重野陽平（2013）「効果的海外研修プログラムの開発研究（1）」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』14, 239-253.
11. 山内ひさ子（2015）「短期海外研修の効果を上げるための取組—長崎県立大学国際情報学部国際交流学科の場合—」『留学交流』49.  
入手先<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/1/18/201504yamauchihisako.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/__icsFiles/afieldfile/2015/1/18/201504yamauchihisako.pdf)>（2016.11.7）
12. 和栗百恵（2012）「福岡女子大学・海外体験学習プログラムの実践から」『留学交流』17.  
入手先<[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/wagurimomoe.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/wagurimomoe.pdf)>（2016.11.7）